高齢社会 役割増す女性

「女性の、女性による、すべての人のための高齢化国際シンポジウム」の会場＝東京・有楽町の朝日ホールで

討論のひろば

シンポジウムの発言から

高齢者の「番犬」の視点で提言

エバ・タフテさん（デンマーク・デンエイジ政策部長）

デンエイジは二百三十万人の会員を持つボランティア組織。会費と寄付のみで運営されている。六十五歳以下の未来の高齢者が一五％もいる。創始者は牧師で、募金し貧しい高齢者に食事と宿を提供した。こうした仕事は、市町村の行政に次第に引き継がれていった。

私たちの活動は、手厚く強力な公共サービスの補完をすることにある。たとえば、退職前の手ほどき、映画会など夜の楽しみ、旅行、電話無料相談、クラブ活動の支援。高齢者の身になった住宅の建設にもたずさわっている。

もっとも重要なのは、高齢者のための番犬となることだ。どんな新たな問題がでてきているか。どこに改革が必要なのか。よくするにはどうすればよいか。高齢者の視点から国や市町村の行政に働きかけ、提言し主張している。

医療と福祉をどう変えるか

赤字の心配いらない仕組みに

今村千弥子さん（秋田大医学部講師）

この一年半に痴呆（ちほう）といわれた人が二百四十三人入院してきた。このうち百一人は医療行為が原因で痴呆にされたり、寝たきりにされている人だった。動脈硬化や高血圧の薬がサービスされすぎて意識混濁が起き、痴呆状態にされてしまっていた。薬をやめただけで元にもどった人もいる。

精神病院や特別養護老人ホームの痴呆特別棟に隔離されることで痴呆症状が悪化している例も少なくない。隔離しなければならない人はごく一部、それもごく一時期だ。痴呆症状を治せることは、スウェーデンだけでなく日本でも実証されている。必要なのは行政の理解と支援だ。

リハビリテーションや看護の人手を厚くした医療を、赤字を覚悟しなくてもできるような医療の仕組みに変えてほしい。

主役は自治体 交付税で後押し

横尾　和子さん（厚生省審議官）

介護に関する行政は、水の中でじっと寝ている大きなカバみたいなものだった。水面から鼻の穴を出している、そんな時代が長かった。それが一九八九年のゴールドプラン（高齢者保健福祉推進十カ年戦略）の制定で、突如、水からあがって大草原をまっしぐらに走りだした。カバはどちらへ走るか。

その前年、政策課長をしていた年の秋に発表した福祉ビジョンには、発想の転換が盛りこまれていた。たとえば高齢者の生活の連続性を維持できるように家庭を支援する原則と地域主義だ。これからの高齢者福祉は自治体が主役。政府は地方交付税をきっちり手当し、権限も委譲する。スウェーデンが八〇年から十年かけてやれたように、日本もこんな青写真をもとに走り始めた。

車いすにやさしい空間づくり

林　玉子さん（東京都老人総合研究所室長）

ゴールドプランには厚生省だけでなく、建設省や運輸省も加わって真剣に取り組んでほしい。

移動が不自由な人には、まず体にあった車いすで、車いすで動き回れる住宅や建築の空間を整えるのが第一歩だ。寝たきり状態の人も、いすに座れば生活の質が格段に上がる。海外では「寝かせきりゼロ」はすでに達成され「座りきりゼロ作戦」が始まっている。

第二に、いくら住宅や街の段差がなくなっても専門的な知識や介護が提供されなければ目的は達せられない。

第三は病院や特別養護老人ホームをみじめな狭い雑居でなく住宅らしくるおいのあるものにすること。住み慣れた地域の中にこぢんまりした施設を分散させていくこと。見知らぬ土地に移された老後は寂しいものだ。

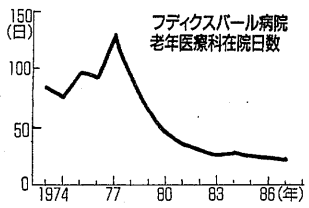
自治体の審議会に女性の声を

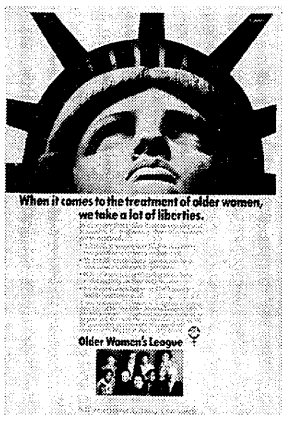
一番ケ瀬康子さん（日本女子大教授）

北欧は昔から福祉が進んでいるように思われがちだが、一九五〇年代は日本と同じ状態だった。それがトールバーンさんたちの努力で、今日の姿を生み出した。福祉は努力して生み出すものだ。

二年後、市町村と都道府県は「老人保健福祉計画」を提出するよう義務づけられている。もしも、女性が積極的に発言しないと、市町村は中央のシンクタンクに作文を書かせて終わり、なんていうことになる。このプランが意味あるものになるかどうかは、住民が自分たちの声をどのくらい反映させるかにかかっている。審議会は男性が圧倒的に多い。そこに女性を一人でも多く入れることが高齢者の幸せにつながる。今、必要なのは、よりよい高齢社会を実現するために政策提言する「運動型ボランティア」です。

ソーニャ・トールバーンさん





涙ぐむ自由の女神のポスター

大熊　要介護の身にならなくても老後は安心はできませんね。グラースさんはシンポジウムで、自由の女神が涙を流しているポスターを出されましたが。

グラース　こう書いてあるんです。米国では、二百八十万人の高齢女性が貧困生活をしている、千二百二十万人の高齢女性が無年金だ、四百万人の中年女性が健康保険を使えない、と。夫と別れると貧困階層に落ち込む率は二倍になります。

樋口　日本女性の老いも「長くて・孤独で・貧しくて」の三点セットです。たとえば、厚生年金は男性が平均十七万円ですが女性は平均十万円。これでも国民年金よりずっとマシなのです。年金は、給料が高いほど、長く働いたほど高くなります。終身雇用、年功序列賃金の中で日本の女性は米国よりもっと不利です。子育てで退職、再就職してもまた介護でやめなくてはならない。女性の老いの貧しさは、老人介護のために拡大再生産されています。

グラース　米国でも、女性は子育てや身内の世話のために仕事を中断するはめになり、そのツケが人生の最後に回ってきます。

トールバーン　スウェーデンでも、いまの高齢女性はかつて専業主婦だった人が多いので年金の平均は男性より低く、引き上げるべきだとの議論が起きています。

大熊　ただ、年金のほかに住宅手当が出るのでしたね。

トールバーン　ええ。家賃が高ければ市町村から手当が出るので引っ越す必要はありません。ケアつきの住宅なら、人生の最期まで住むことができます。高齢者にとって、とても大事なことです。安心感を持てるからです。

樋口　東京近郊の都市で調べたら、故郷を後にして引き散られて来た八十歳以上の「呼び寄せ老人」「引き取られ老人」は女性が男性の三倍でした。長男のいる都市に引きとられ、あらゆるものから切り離され、生きがいのない老後を過ごしています。夫の死後、家を相続できなかったり、立ち退きを迫られたりする女性もいて、まさに、女三界に家なし、「高齢女性ホームレス時代」です。

大熊　トールバーンさんは、病院を「ついのすみか」にしていた高齢者が地域で生活できるように改革したお仕事で有名ですが。

トールバーン　私がフディクスバール病院の老年医療科部長に着任した一九七八年当時は、平均在院日数は百三十日を超え、寝たきり状態の人もいました。私は病院の職員を説得して、患者さんの能力を取り戻すことができるように仕事のやり方を変えました。男性のお年寄りはすぐに甘やかされます（笑い）。在院日数はみるみる減りました（グラフ）。老人性痴呆（ちほう）の診断名で精神病院に送られる人が激減しました。お年寄りを尊重し、積極的な期待をよせること、ホームヘルパーの権限を大きくすること、二十四時間ケアで安心感を与えるといった発想の転換をしたのです。命令的でない、女性的なリーダーシップも成功のカギでした。

グラース　まず女性が自らの態度を変えるべきです。夫の収入に頼りっ放しだと未亡人になって大きなショックを受けます。政治的な場にも積極的に参加すべきです。私たちの会員は二万人になりました。年齢や性別による差別をなくす公民権運動も起こしています。

大熊　昨年成立した「障害を持つアメリカ人法」も一種の公民権法ですね。あの法律によって高齢者も街に出やすくなったのでは？

グラース　ええ。車いすの人が使えない建物や交通機関、耳の聞こえない人が使えない電話などは法律違反になりました。高齢者を含め、多くの人が一致団結したからできたことです。

社会保障制度の改正を目指し、国に圧力をかけています。年金を受けやすくしたり、看病休暇、デイケア、ナーシングホームの職員の待遇問題などについて包括的な政策を提言しています。

大熊　今回の私たちの「マリオン宣言」にも「貯金から社会保障へ」という項目がありますが。

トールバーン　スウェーデンでは、すべての政党が高齢者や障害をもつ人の介護を公的に維持していこうと思っています。高かった税率も最近改革があり、所得の五〇％程度になりました。

樋口　日本では将来が不安なため、教育・住宅に金がかかるので貯金額が大きく、それに税金を加えると、実際に自由に使える額はスウェーデンと大差はありません。より厳しい老いに立ち向かう女性こそ、問題提起し、男性を変え、日本の体質を変えていく力になると確信しています。

グラース　アメリカでも、貯蓄によって老後が安定するとは思えないのです。我々の社会保障制度にも欠点がありますが、年金制度は日本の方々にも誇れると思います。日本は豊かで技術も優れ、能力もお持ちです。自動車の性能だけでなく、社会保障の世界でも国際社会の中でリーダーシップをとってほしいと期待しています。

年金に男女間格差 問題提起 女性こそ 政治にも積極的に

トールバーンさん　樋口さん　グラースさん

マリオン宣言 1991.9.7

私たちは、すべての人々が、生き生きとその生涯を送ることのできる高齢社会の生活と政治、そして文化の創造に挑戦します。人間の尊厳に根ざし、それぞれの自己実現を可能とする日々を願い、次の諸点における発想の転換を確認して、その徹底と実現に向け、一層の努力をすることを宣言します

①モノから人へ、ハコモノ予算から人手重視予算へ
②貯金から社会保障へ
③女手から男女手へ
④血縁依存から地縁へ、友情へ
⑤高齢者政策決定部門は紅一点から女男半々へ
⑥「寝かせきり」から車いすへ、そして「すわりきりゼロ」へ
⑦密室から街へ
⑧雑居部屋から個室と団らん室へ
⑨「おばあちゃん」から「○○さん」へ
⑩申請待ち行政から出前・ご用聞き行政へ
⑪タテ割り行政から横ネットワーク行政へ
⑫偏差値教育から可能性引き出す教育へ
⑬戦争から兵生へ
⑭孤立から自立へ、そして連帯へ
⑮日本から世界へ――すべての高齢者と介護者の連帯を

「女性の、女性による、すべての人のための高齢化国際シンポジウム」参加者一同

座談会出席者

ソーニャ・トールバーンさん

スウェーデン・ウメオ大学老年医療科顧問。従来の老人観を変え、包括性と安心感を重視した医療福祉で、同国の老年医療に革命を起こしたことで知られる。ノルウェーにもアドバイザーとして招かれる。

ルー・グラースさん

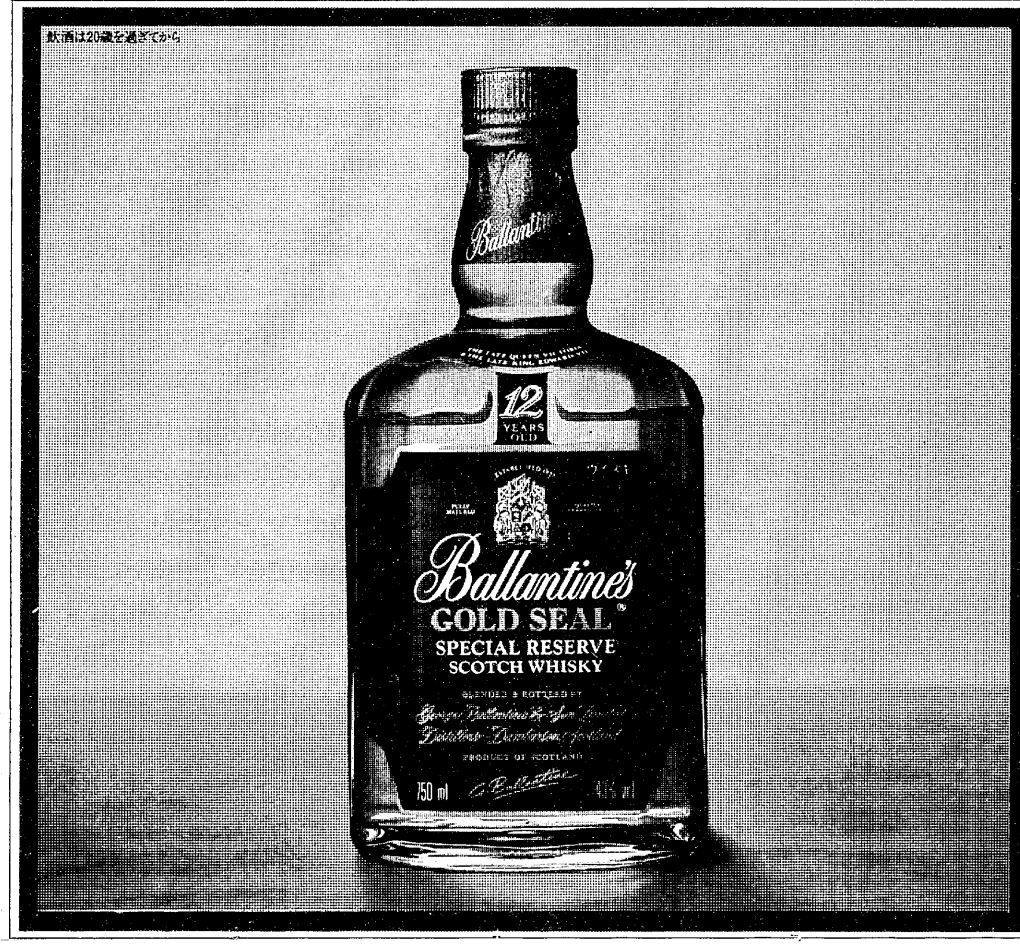
米国高齢女性連盟（OWL）会長。医療ソシアルワーカー。ニューヨーク州の高齢問題局長時代、死期を悟ったOWLの創始者、T・ソマーズに請われ、理事に。85年以来現職。

樋口　恵子さん

高齢化社会をよくする女性の会代表。美術史を学び、学研、キヤノンをへて評論活動に。「粗大ごみ」「ぬれ落ち葉」など数々の名文句で知られる。86年より東京家政大学教授。

司会　大熊由紀子論説委員

飲酒は20歳を過ぎてから



スコッチを
知るほど
バランタインが
好きになる。

バランタイン ゴールドシール 12年
希望小売価格(消費税込み)¥8,000 輸入元サントリーエアライドライオンズ株式会社

Ballantine's